

女子大学

企画課管理用 教 — C — 1

推進主体	プロジェクトチーム
責任者	佐藤 琢三副学長

分類			実施計画	開始年度	完了年度	将来的な継続
教	—	C	新しいリベラルアーツ教育の構築	令和 4 年度	令和 7 年度	あり(予定)

① 目的・内容
<p>わが国の経済が成長期を終え成熟期に入り、それが衰退につながりかねない懸念が拭えないなか、受験生や保護者の間で就職とその後キャリア形成に対する不安は増している。本学は、広い学問領域を学びその後自ら選んだ専門を深めるというリベラルアーツ教育を核に、汎用的能力と専門的知識・技能を有する人材の育成に努め、多様な職業領域に卒業生を送り出してきた。本計画はこれまでの取り組みをもとに、新たな課題状況のなかでリベラルアーツ教育の再構築を図ろうとするものである。</p> <p>具体的には、①長い歴史を有するリベラルアーツ教育を今日的課題状況のなかでグローバルな視点から再検討すること、②この再検討では本学と同じように女性の少人数教育で優れた人材の育成を図ってきたアメリカの女子リベラルアーツカレッジ等を参考にすること、③この検討を具体的なカリキュラム改革や入試改革につなげていくこと、④学生がどのような力を身に付けているのかを可視化し、それを職業選択やキャリア形成への支援につなげていくこと、である。</p> <p>具体的な提言とアクション・プランを作成し、段階的にそれを実行に移しつつ、そのための体制を同時に強化することで、本学のさらなる発展の礎となることを目指す。</p>

② 到達目標(数値目標/定性目標) ※数値目標を設定できない計画は、定性目標を設定すること。
<p>リベラルアーツ教育の再構築に向けた国内・国際・総括シンポジウムの開催と書籍の刊行 中間提言とアクション・プランの作成 中間提言のカリキュラム改革への反映、入試改革の検討着手 リベラルアーツ教育の成果の可視化(資格取得など)とキャリア支援体制の拡充 改革の評価と最終提言の策定</p>

③ ロードマップ							
年度	令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
予定	プロジェクトチームの結成	「今日のリベラルアーツ教育」国内シンポジウム①	「今日のリベラルアーツ教育」国際シンポジウム②	中間提言の発出、アクション・プランの策定	「今日のリベラルアーツ教育」総括シンポジウム③	書籍の刊行、アクション・プランの実行	改革の評価と最終提言の策定

④ 数値目標の詳細 ※設定できない計画については記載不要。							
指標の名称			指標の定義(計算式/説明)				
1	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							
2	直近	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)
目標							
実績							

⑤ 実施計画／実施報告		
年度	実施計画	実施報告／今後の課題
(2022年度) 令和4年度	初年度にあたる本年度の目標は実施計画書に則り、①プロジェクトチームの立ち上げ、②「今日のリベラルアーツ教育」国内シンポジウムを実施し、③その成果を学内外に発信することである。すなわち、プロジェクトチーム内で本学の現状と問題点を整理することに加え、国内シンポジウムで学外の識者と今日的課題状況における本学のリベラルアーツ教育について議論を深めることにより学内外で問題意識を共有し、具体的な提言並びにアクションプランの仮説を構築したい。	初年度にあたる本年度は実施計画書に則り、①プロジェクトチームを立ち上げ、②国内シンポジウム「ポストコロナのリベラルアーツ教育と本学のサバイバル」を5月28日に開催した。学外から多彩なパネリストをむかえ、活発な議論がかわされた。③当該シンポジウムの成果を含めた単行本の今年度中の発刊プロセスが順調に進捗している。具体的な提言並びにアクションプランについては、現時点では公表するには至っていないが、プロジェクトチームは来年度開催予定の国際シンポジウムに向けてのコンセプト作りと参加パネラーの決定という段階まで議論を進めた。
(2023年度) 令和5年度	本年度は当初の計画通り、国際シンポジウム“Liberal Arts Education in a Changing World”を開催することと致したい。具体的には、リベラルアーツ教育を実践するとともにその論客としても世界的に著名なCathy Davidson氏 (Distinguished Professor, The City University of New York)、C.J. Wee Wan-ling氏 (Professor, Nanyang Technological University, Singapore)を招聘し、江川雅子氏(成蹊学園 学園長)、矢口祐人氏(東京大学大学院教授)らと共に本学のリベラルアーツ教育のあり方についてグローバルな視点から考える。	予定通り、2023年10月7日に国際シンポジウム“Liberal Art Education in a Changing World”を本学222及び223教室において和祭と共同開催した。基調講演とパネルディスカッションの2部構成とし、同時通訳を入れて英語で実施した。当日は予想を超える約100名の参加者が集い、活発な議論に耳を傾けるとともに質疑応答にも積極的に参加していただいた。本シンポジウムを通して、①大学におけるリベラルアーツ教育の意義、②教育方法(pedagogy)に対する建設的な示唆が得られたことに加え、③学習院大学との統合後において本学が学部としてどのように貢献すべきかについて一定の方向性が明らかになった。
(2024年度) 令和6年度	当該年度の目標は、2023年度に成功裡に開催した国際シンポジウムの内容を英語と日本語を併記する形で一般書籍として刊行することである。具体的には、シンポジウムで行われた基調講演5件、パネルディスカッション、総括コメント、フロアとの対話を中心としつつ、本シンポジウムを終えた後の各パネリストの考察を加えることと致したい。国際文化交流並びに女子教育の蓄積を、本学がひとつの学部として学習院大学に統合後にどのように活かし貢献できるのか。また、そのためにはどのような体制・教育内容が望ましいのか。本書はこれらの問いについて具体的に考える材料を提供することを旨したい。	予定通り、2023年10月7日に国際シンポジウム“Liberal Art Education in a Changing World”の書籍化を関係各方面の協力を得ながら順調に進めている。本書はおそらく女子大学として刊行する最後の一般書籍となろう。内容は、開会の挨拶(大桃学長)、パネリストによる基調講演、パネルディスカッション、フロアとの対話、閉会の挨拶(平野専務)まで全てを網羅する。2022年度に実施した国内シンポジウムの報告も併せて加える。形態としては、シンポジウムの主言語であった英語を原語とし、日本語の妙訳を付ける。
(2025年度) 令和7年度	学習院大学との統合計画が浮上するなど当該プロジェクトの前提条件が大きく変化した。そこで、2025年度は学習院大学との統合後を見据え、独立した女子大学ではなく、総合大学の一学部においてリベラルアーツ教育の構築が考えられるか否かについての検討を開始することと致したい。具体的には、公開情報でリベラルアーツ教育を含む伝統的に確立した学術領域以外の学際的なプログラムを調査した後、公式・非公式のヒアリングを実施し、それを報告書として刊行することと致したい。	計画に先行して国内シンポジウム1件、国際シンポジウム1件、書籍(日本語)1冊、同(日英語)1冊を刊行し、加えて、当初予定しなかった学習院大学との統合を踏まえ、学長と協議した結果、本年度で当該プロジェクトは終了することとした。したがって、当初予定していた調査や報告書の刊行は実施せず、本年度はいわゆる「残務処理」に徹した。なお、本プロジェクトを通じて令和6年度末に刊行した書籍「Liberal Arts Education in a Changing World」は、3月に開催予定の「学習院女子大学 28年 感謝の集い」にて来場者に配布予定である。

⑥ 計画の成果・今後の方針 ※計画を中止する場合はその理由を記載のこと。

【計画の終了理由】

女子大学が学習院大学と統合することに伴い、当初想定していた本事業の前提(女子大学としての新しいリベラルアーツ教育の構築)が変更になったため、本事業計画を終了する。

【到達目標に対する結果】

本計画の成果としては、令和7年度までの目標は概ね達成されたことに加え、同8年度に予定されていた書籍も同7年3月に刊行した。

※計画完了時点で記載してください。 ○・・・必須事項 △・・・必要に応じて記載

○②到達目標に対する結果

○計画の中止理由(※中止する場合)

△今後の見通し・課題(通常事業化など)

△その他